

病害虫発生予察情報（9月予報）

平成29年8月30日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	いもち病 (穂いもち)	発生量：やや少 (発病株率 0.4%)	8月上中旬の葉いもち発生量 ：やや多 (+) 8月上中旬の穂いもち発生量 ：少 (発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：並～多い (+)
	紋枯病	発生量：多 (発病株率 8.8%)	8月上中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (+)
	稲こうじ病	発生量：多 (富士山麓地域のみ) (北駿地域の発病株率 5.5%)	北駿地域の 8月中旬発生量：多 (+)
	トビイロウンカ	発生量：並 (寄生数 0.23 頭/株)	8月上中旬発生量： 少 (発生なし) (-) 8月の成虫誘殺数：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (-)
	斑点米カメムシ類	発生量：並	8月上中旬発生量：少 (-) 8月の成虫誘殺数：並～多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (-)
ダイズ	べと病	発生量：やや少 (発病株率 16.9%)	8月中旬発生量： 少 (発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：並～多い (+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率 14.9%)	8月中旬発生量：少 (-) 8月の成虫誘殺数：やや少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (-)
チャ	炭疽病	発生量：やや少 (病葉数 24.5 葉/1.25m ²)	8月中下旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：並～多い (+)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (叩き落とし虫数 7.7 頭/4カ所)	8月中下旬発生量：やや少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (±)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：並 (叩き落とし虫数 0.9 頭/4カ所)	8月中下旬発生量：やや少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (±)

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
チャ	チャノホソガ	発生量：やや少 (巻葉数 2.8 葉/1.25 m ²)	8月中下旬発生量：少 (－) 8月の成虫誘殺数：並 (±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)
	ヨモギエダシヤク	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ所)	8月中下旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)
	カンザワハダニ	発生量：少 (寄生葉率 2.2%)	8月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(－)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：少 (寄生株率 2.6%) 発生時期：やや早い	8月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：並～多い(－)
ウンシュウ ウミカン	黒点病	発生量：並 (発病度 0.9%)	8月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(＋)
	ミカンハダニ	発生量：少 (寄生葉率 5.6%)	8月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(－)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (寄生果率 0.1%)	8月下旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(－)
中晩柑類	かいよう病	発生量：並 (発病度 0.9%)	8月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(＋)
カキ	ハマキムシ類	発生量：やや少	8月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)
果樹全般	カメムシ類	発生量：やや多	スギ・ヒノキ毬果量：多 (＋) 8月1～4半旬誘殺数：少 (－) ヒノキ毬果吸汁痕数：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)
ネギ	疫病	発生量：やや少 (発病株率4.9%)	8月中旬発生量： 少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(＋)
	黒斑病・葉枯病	発生量：やや少 (発病株率2.9%)	8月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(＋)
	シロイチモジヨトウ	発生量：やや少 (発病株率4.3%)	8月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)
	ネギハモグリバエ	発生量：多 (発病株率 41.5%)	8月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)
	ネギアザミウマ	発生量：やや多 (発病株率 37.5%)	8月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	炭疽病	発生量：やや多 (10月発病株率 1.1%)	8月上旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(+)
	うどんこ病	発生量：やや少 (10月発病株率 1.3%)	8月上旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～多い(±)
	ハダニ類	発生量：やや多 但し、中部は多 (10月寄生株率 10.7%)	8月上旬発生量：並(±) 但し、中部は多 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：少 (10月寄生株率 0.9%)	8月上旬発生量：少(-) 8月7日モントラップ捕獲数：並～やや少(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(±)
キク (露地)	白さび病	発生量：少 (発病株率 0.1%)	8月中旬発生量： 少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～多い(+)
	黒斑・褐斑病	発生量：並 (発病株率 9.2%)	8月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：並～多い(+)
	えそ病 (トマト黄化えそウ イルス：TSWV)	発生量：やや少 (発病株率 0.8%)	8月中旬発生量： えそ病：少(発生なし)(-) アザミウマ類：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (被害株率 8.6%)	8月中旬被害量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)
	ハダニ類	発生量：やや少 (寄生数 1.0頭/10葉)	8月中旬発生量： 少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)
	アブラムシ類	発生量：やや少 (寄生株率 1.0%)	8月中旬発生量： 少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)
作物全般	オオタバコガ	発生量：多	8月の成虫誘殺数：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のご過去 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のご過去 10 年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【イネ】

<生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：8月8日～18日）では、草丈、稈長、穂長、茎数および葉色は平年並であった。病虫害防除員からのアンケート調査によれば、生育は平年並～やや早い傾向にある。

8月上中旬の調査地点におけるイネの生育状況

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)	県平均
草丈 (cm)	93.3 (91.0)	— —	88.3 (91.2)	86.0 (89.6)	97.0 —	90.8 (90.7)
稈長 (cm)	— (77.5)	82.5 (80.1)	76.1 (75.6)	73.7 (79.7)	83.1 (82.5)	79.9 (79.9)
穂長 (cm)	— (17.6)	19.5 (18.3)	18.6 (18.2)	19.3 (18.5)	19.4 (18.6)	19.3 (18.4)
茎数 (本)	22.1 (22.7)	18.6 (20.6)	20.8 (20.6)	21.6 (22.0)	19.6 (22.2)	20.5 (21.6)
葉色 (指数1-7)	4.4 (4.0)	3.9 (4.0)	3.8 (4.2)	3.8 (4.2)	3.7 (3.1)	3.9 (3.9)

()内は平年値

※穂揃い期前のほ場は草丈、穂揃い期以降のほ場については稈長・穂長を計測した。

●いもち病（穂いもち）

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査では、葉いもちの平均発病株率は1.52%（平年1.2%）で、平年よりもやや多い発生であった。特に、中遠地域の一部ほ場で多発していたが、停止型病斑が多かった。穂いもちの発生は認められなかった（平年発病株率0.6%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（感染好適条件：気温15℃～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20℃～25℃を全て満たす時）。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・上位1～3葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂ぞろい期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。

- ・本県では MBI-D 剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県では QoI 剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

●紋枯病

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は10.2%（平年6.8%）と平年より多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（本病は生育適温30～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●稲こうじ病

予報の根拠

- ・北駿地域のみで発生が見られた。8月中旬に北駿地域で行った巡回調査では、本病の発病株率は6.4%（平年2.2%）、発生面積率は70%（平年29%）と平年よりも発生が多かった。

防除対策

- ・収穫時に落下した病粒に含まれる多量の厚壁胞子が土壌中に残り、翌年の伝染源となる。本年度の発生ほ場では、次年以降も適期に薬剤防除を実施する。
- ・すでに発病している稲こうじ病については散布できる効果的な防除薬剤はない。
- ・詳細は本予察情報に付属の技術情報を参照のこと。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査ではトビイロウンカは確認されなかった（平年0.04頭/株）。
- ・7月第5半旬に、磐田市加茂で本種の初誘殺が確認された。その他の地点では本種の誘殺は確認されていない。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、トビイロウンカの増殖をやや助長する。

防除対策

- ・9月の気温が高い場合には急増することがあるので注意する。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

- ・ 8月上中旬の水田におけるすくい取り調査では、28%の水田（平年 29%）からアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ等が捕獲され、平均捕獲数は 0.5 頭/30 回振り（平年 1.1 頭）と平年より少なかった。
- ・ 8月第 4 半旬時点の県内 3ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメとアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平年並～多く推移している。
- ・ 1 か月予報では、9月の降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、斑点米カメムシ類の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。穂揃期とその 7～10 日後の 2 回薬剤散布を行うと効果が高い。
- ・ なお、農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稻のカメムシを防除する時期に多く、水稻のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報を図る等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html）を参照すること。

【ダイズ】

<生育の概況等>

生育は平年よりやや早い。

●べと病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率 3.4%）。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する（本病は 15～20℃程度の比較的冷涼で雨の多いときに発生する）。

防除対策

- ・ 発病がみられるほ場では薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 0.8%（平年 4.6%）と平年より少なかった。
- ・ フェロモントラップによる誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。
- ・ 1 か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、ハスモンヨトウの増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 食害（特に白化した葉）に注意してほ場を観察し、若齢幼虫を見つけ次第、薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●カメムシ類

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.6%（平年0.3%）と平年より多かった。
- ・ ダイズには主にホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシが発生するが、近年、ミナミアオカメムシが増加傾向にある。ミナミアオカメムシの成虫は黄緑色で体長12-16mm、幼虫は黒褐色または黄緑色の体色に白や赤色の斑点を有する。ほ場内を観察し、寄生を確認した場合は薬剤防除を実施する。

●ハダニ類

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.8%（平年3.7%）と平年より少なかった。
- ・ 中～下位の葉裏を観察し、寄生が多い場合は薬剤防除を行う。

【チャ】

<生育の概況等>

三番茶の摘採は遅れたが、7、8月の降雨により芽伸びはよい。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、新芽での平均発病葉数は5.12葉/1.25㎡（平年20.6葉/1.25㎡）で、平年より少なかった。病葉数が1㎡あたり20葉を超える茶園は2カ所のみであった。これは、炭疽病菌の感染を助長する降雨条件（長時間にわたって葉を濡らすような降雨）が少なかったためと考えられる。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～多いため、本病をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病の感染には、新芽生育期に降雨による胞子の飛散と10時間以上の葉の濡れが必要であり、本病の潜伏期間はおよそ20日と長い。秋芽生育初期に半日以上続く降雨があった場合には、早めに防除を行う。一方、生育中期以降に降雨があった場合は、たとえ感染しても秋冬番茶や秋の整枝作業で、新芽の上部は症状が出る前に刈られるので、防除の必要はない。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は14.2頭/4カ所（平年18.0頭/4カ所）で平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、発生状況を確認し、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は1.2頭/4カ所（平年1.6頭/4カ所）で平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、発生状況を確認し、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.8葉/1.25㎡（平年4.7葉/1.25㎡）で、平年に比べ少なかった。
- ・ フェロモントラップによる誘殺数は、ほぼ平年並で推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、秋冬番茶を摘採する茶園では適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.16頭/4カ所（平年0.10頭/4カ所）でほぼ平年並だった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 平年は8月後半に成虫が発生し、9月になると幼虫の発生が見られる。本種は、茶園内で局所的に発生するので、茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、茶株面の平均寄生葉率は0.5%（平年1.8%）で平年に比べ少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温が高く、降水量は平年並～多いため、天敵のカブリダニ類の増殖に適している。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、天敵への影響が少ない薬剤を選択し、直ちに防除を行う。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.6%（平年16.6%）で平年に比べ少なかった。
- ・ アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第3世代予想ふ化最盛日は、8月30日の計算によると平年より5日早い9月13日と予想される。

防除対策

- ・ 地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については防除所ホームページで提供している。

<その他の病害虫>

●褐色円星病

- ・一番茶摘採期に発生が多かった茶園では、秋芽の生育期～硬化期に1～2回防除する。本病は、春先になって落葉が始まってからの防除では効果が無い。

●赤焼病

- ・つゆひかり等の感受性品種では、春先に発病して枯死した枝に病原細菌が残存して越冬している。この菌が秋以降、台風等により増殖し冬の発病につながるため、台風による風雨の影響を受けた場合は通過後に薬剤散布を実施し菌密度を下げておく。

●チャトゲコナジラミ

- ・8月中下旬の巡回調査では、茶株裾面の平均寄生葉率は19.6%（平年31.0%：過去7年）で平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は高いため、発生をやや助長する。
- ・本種は県内の多くの茶園に発生が広がっており、8月中下旬に第3世代成虫が発生した。成虫の発生が多い茶園では、9月初旬からの若齢幼虫期に防除を行う。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬剤が届くように散布する。防除前に裾刈を行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。なお、防除の際には、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。

●チャノホコリダニ

- ・8月中旬～9月にかけて乾燥が続くと、秋芽にチャノホコリダニが多発することがある。秋冬番茶を摘採する茶園では、発生に注意し、早めに防除する。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況等>

主要産地における生育は平年並～5日程度遅い。

●黒点病

予報の根拠

- ・8月の巡回調査では、平均発病度は0.03（平年0.6）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報によると、気温は高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・薬剤の散布間隔は前回の散布日から25～30日、または累積降雨量250～300mmを目安にして防除を行う。
- ・早生品種の防除は収穫前日数に注意する。
- ・アメダスの気象データを用いたシミュレーションによる要防除時期の予想は防除所ホームページを参照。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は5.2%（平年10.7%）で平年より少なかったが、地域によっては発生の多い園地がみられた。
- ・1か月予報によると、気温は高いが、降水量は並～多いと予想され、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・着色期以降に発生すると果実は着色不良となり、商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、平均寄生果率は0.2%（平年0.2%）で平年並であった。果梗部被害度は0.54（平年1.7）、果頂部被害は0.03（平年被害度0.5）と平年より被害は少なかった。
- ・1か月予報によると、気温は高いが、降水量は並～多いと予想され、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・アメダスの気象データを用いて有効積算温度を計算したところ、第7世代成虫の発生ピークは9月中下旬と予想される（各産地における成虫発生時期の予想についてはホームページを参照）。
- ・薬剤防除適期は各世代の発生ピーク7日前～当日である。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・普通温州園では、寄生果率10%を目安に防除を行う。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・8月の巡回調査では、果実の平均発病度は0.1（平年0.4）、葉の発病度は0.1（平年0.7）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・台風や長雨により感染が拡大する恐れがある。降雨後に散布しても、すでに感染した組織内の病原菌にはほとんど効果がないので、気象情報とは場の発生状況に注意して降雨前の予防散布を行う。
- ・夏秋枝は罹病しやすく伝染源となるので、本病が多発している圃場では夏秋枝を切除する。

【カキ】

<生育の概況等>

主要産地における生育は地域により異なり、平年より早いところから5日程度遅い地域がみられる。

●ハマキムシ類

予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、平均被害葉率は1.0%（平年被害葉率1.6%）で、平年より少なかった。
- ・西部地域のナシ園におけるフェロモントラップ調査におけるチャハマキ及びチャノコカクモンハマキ誘殺数は平年より多かった。
- ・1か月予報によると、気温は高く、降水量は平年並～多いと予想され、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・地域の予察灯やフェロモントラップの調査を参考にし、適期防除（成虫発生盛期の10～14日後）に努める。（誘殺データは防除所ホームページを参照）。

<その他の病害虫>

●フジコナカイガラムシ

- ・8月下旬の巡回調査では、平均寄生果率は0.8%（平年2.2%）で平年より少なかった。
- ・本種は果実とヘタの間の薬剤が届きにくい所に寄生しているので散布を丁寧に行う。

●カキヒメハダニ

- ・8月下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は5.1%（平年0.03%）と平年より多かった。
- ・本種に加害されると、葉にカスリ状の被害痕がみられ白っぽくなる。多くの場合実害はないが、激しく加害されると落葉する恐れがあるため、多発した場合は防除を行う。

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・8月第1～4半旬までのフェロモントラップでは、チャバネアオカメムシの平均合計誘殺数は4.2頭/箇所（平年208.4頭/箇所）と平年よりも少なかった。
- ・8月下旬のスギ、ヒノキにおけるカメムシ類の平均寄生数は3.7頭/10結果枝（平年1.1頭）と平年より多かった。

防除対策

- ・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、防除所ホームページを参照する。
- ・スギ・ヒノキ林付近の果樹園では多発しやすいため、ほ場の発生状況をよく観察し、発生が見られれば防除を行う。

【ネギ】

<生育の概況等>

生育はほ場によりばらついている。

●疫病

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率2.7%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（病原菌生育適温28～30℃）。

防除対策

- ・多湿な環境で発生が多いため、例年発生が認められるほ場では、溝を切るなどしてほ場排水を良くする。
- ・窒素肥料の多用は本病を助長するため、施用量に気をつける。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、上位3葉における平均発病株率が0.4%（平年発病株率3.8%）と、平年に比べ少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 肥料切れや草勢の衰えは発病を助長するので、適切に施肥を行う。
- ・ 風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除につとめる。
- ・ 薬剤防除は、治療剤に頼りすぎないように注意し、予防散布または初期防除につとめる。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.2%（平年2.0%）で平年に比べ発生が少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年9月に発生が増加することから、ほ場をよく観察し、薬剤感受性が高い若齢幼虫のうちに防除する。
- ・ すでに発生が増加しているほ場では、早めに薬剤散布を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は43.8%（平年32.0%）で平年に比べ発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 生育初期に本虫が多発すると生育が遅れるため、本種の発生に注意し早期に防除を行う。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は39.4%（平年37.5%）で平年並だった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 多発すると生育が遅れるため、発生が増加する前に防除を行う。すでに、発生が増加しているほ場では早めに防除を行う。
- ・ 本種はネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（IYSV）を伝搬する。罹病株はタマネギやエシャレット等、他のネギ類にも感染・発病するため、見つけ次第ほ場の外に持ち出し、土中に埋める等の処分をする。

【イチゴ】

<生育の概況等>

苗の生育は平年並であるが、地域よってばらつきがある。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回では、平均発病株率は0.5%であった（平年値なし）。また、病害虫防除員等からの情報では、発生は平年並～少であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は見つけ次第、培地（培土）も含めて抜き取りビニール袋に入れ処分し、定植苗には使用しない。
- ・ 薬剤散布は予防散布を中心に努める。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では平均発病株率は0.4%であった（平年値なし）。また、病害虫防除員等からの情報では、発生は平年並～少であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 高温期の発病は少ないが、特に6、7月に発生がみられたほ場では、育苗期から予防的に薬剤散布を行い無病苗の定植に努める。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率7.2%であった。また、中部地域の石垣栽培では平均寄生株率は13.3%と県平均より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 近年、本ほでの多発が続いていることから、育苗期の防除を徹底し、本ほへ持ち込まないように注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率0.1%で、平均被害株率1.5%であった。また、病害虫防除員等からの情報では、寄生はほぼ平年並であった。
- ・ フェロモントラップの調査によると、8月中旬までの誘殺数は、県中部で平年並、県西部では平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 初期発生に注意し、若齢のうちに防除を行う。施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

<その他の病害虫>

●コガネムシ類

- ・ 県西部の予察灯におけるコガネムシ類の誘殺状況は、ドウガネブイブイが平年並、アオドウガネが平年より多かった。

- ・例年発生がみられるほ場では、定植前に薬剤を本ほに土壤混和する。定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ほへ幼虫を持ち込まないように注意する。

【トマト】

<その他の病害虫>

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

- ・1か月予報によると、気温は平年より高いため、ハウス内でのコナジラミ類の増加、黄化葉巻病の発生が懸念される。本病は生育初期に感染すると特に被害が著しいため、育苗期間中に感染が疑わしい株が見られたら、定植せず取り除き、育苗期から体系的にコナジラミ類の防除を行うことが重要である。

【キク（露地）】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●白さび病

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（本病の発病適温17℃前後）。

防除対策

- ・9月の高温は本病の病原菌の生育に適さないが、初期防除を怠ると生育に好適な条件となる秋以降の防除が困難となるので、発生ほ場では初期防除に努める。
- ・発生ほ場、特に罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.3%（平年3.6%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（本病は特に降雨が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では手遅れとなるので、例年発生が見られるほ場では薬剤の予防散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。また、土の上に落ちた被害葉は、伝染源となるため、ほ場に放置しない。

●えそ病（トマト黄化えそウイルス：TSWV）

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、本病の発生は確認されず（平年0.2%）、媒介虫であるアザミウマ類による被害株率も2.0%（平年8.2%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～多いため、媒介虫であるアザミウマ類の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマなどのアザミウマ類は本ウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

●アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ）

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均被害株率は2.0%（平年8.2%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、媒介虫であるアザミウマ類の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ えそ病が認められた場合は被害株を速やかに抜き取り処分するとともに、アザミウマ類の薬剤防除を徹底する。
- ・ 開花期のキクは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、開花初期から発生に注意する。
- ・ 中～下位の葉裏を観察し、寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●ハダニ類（ナミハダニ）

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、雌成虫の寄生は確認されなかった（平年0.4頭/10葉）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、ハダニ類の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 中～下位の葉裏を観察し、寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。ただし、薬剤抵抗性を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年0.6%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、アブラムシ類の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 芽における発生に注意し、初期防除に努める。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は平年より多く推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、オオタバコガの増殖を助長する。

防除対策

- ・芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3. 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成29年8月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 8月26日から9月25日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。期間の前半は、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。期間の後半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	30	50
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	20	30	50
2週目	気温	30	50	20
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

- 1か月 : 8月26日(土)～9月25日(月)
1週目 : 8月26日(土)～9月1日(金)
2週目 : 9月2日(土)～9月8日(金)
3～4週目 : 9月9日(土)～9月22日(金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成 29 年 8 月 25 日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 7月から9月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

9月 天気は数日の周期で変わらでしょう。気温は、高い確率50%です。

10月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

11月 平年に比べ晴れの日が多いでしょう。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

【気温】

3か月			9月			10月			11月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	30	50	20	30	50	20	40	40	30	30	40

【降水量】

3か月			9月			10月			11月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
40	40	20	30	40	30	40	40	20	40	40	20

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	9月	10月	11月	9月	10月	11月
浜松	24.1	18.8	13.5	249	165	119
静岡	24.1	18.9	13.9	292	200	132
三島	23.6	18.0	12.8	243	184	107

*1981年～2010年の平均 *降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

平成 29 年度 技術情報第 2 号

イネ^{いな}稲こうじ病

平成 29 年 8 月 30 日

静岡県病害虫防除所長

北駿地域で稲こうじ病が多発しています。
収穫物への混入に注意してください。

1 発生状況

8 月中旬に北駿地域で行ったイネの巡回調査の結果、稲こうじ病の発病株率は 6.4% (平年 2.2%)、発生面積率は 70% (平年 29%) と平年よりも発生が多かった。

本病は穂ばらみ期頃の低温・多雨により発生が助長されるため、こうした気候となりやすい富士山麓地域では、発生に注意が必要である。

2 本病の特徴

本病はイネの籾に暗緑色の病粒（菌核）を形成する（図 1）。病籾が収穫物に混入することで、農産物検査で規格外になるなど、品質を大きく低下させる。このため、収穫前に罹病穂を抜き取るなどして、収穫物への菌核の混入に注意する。

収穫時に落下した病粒に含まれる多量の厚壁胞子が土壌中に残り、翌年の伝染源となる。このため、発生ほ場では翌年以降も注意が必要である。

3 防除方法

すでに発病している稲こうじ病については散布できる効果的な防除薬剤はない。本病の薬剤防除は予防散布が基本であり、適期は穂ばらみ期頃である。本年度の発生ほ場では、次年以降も適期に薬剤防除を実施する。稲こうじ病に登録のある主な防除薬剤を表 1 に示した。

防除適期など、防除方法の詳細については、農研機構の「イネ稲こうじ病の薬剤防除マニュアル」を参考にする。

(URL:https://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/files/narc_man_falsesmutofrice.pdf)



図1 イネ稲こうじ病の病粒

表1 イネの稲こうじ病に対する主な防除薬剤¹⁾

登録種類名	FRAC ²⁾ コード	商品名	使用方法	希釈倍数・散布液量	使用時期	本田の使用回数
銅水和剤	M1	ドイツボルドーA	散布	2000倍・60～150リットル/10a	出穂10日前まで	-
銅粉剤		撒粉ボルドー粉剤DL	散布	3～4kg/10a		-
		Zボルドー粉剤DL	散布	3～4kg/10a		-
シメコナゾール粒剤	3	モンガリット粒剤	湛水散布	3～4kg/10a	収穫45日前まで	2回以内
		モンガリット1キロ粒剤	湛水散布	1～1.3kg/10a		2回以内
			無人ヘリコプター ³⁾ による散布	1kg/10a		

- 1) 農研機構「イネ稲こうじ病の薬剤防除マニュアル」を基に作成
(https://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/files/narc_man_falsesmutofrice.pdf)
- 2) 薬剤を作用機構ごとに分類した番号。薬剤耐性菌の発生を未然に防ぐためには、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する必要がある。
- 3) 無人ヘリコプターによる農薬散布を行う際には、農林水産省作成の「空中散布等における無人航空機利用技術指導指針」に沿って散布する。

問い合わせ先：静岡県病虫害防除所（TEL：0538-36-1543）

病虫害防除所 HP（URL）：

<http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病虫害防除基準 HP（URL）：<http://www.s-boujo.jp/>